



多発するゲリラ豪雨などによる浸水被害を防ぐため東京都は、江東区の地下30階に直径6.5mという巨大下水道トンネル工事を進めている。施工しているのは大豊建設で、技術力と施工実績が認められた。

延長4.2kmの途中に3本の鉄道が走り、中でも東京メトロ東西線とはわずか5分しか離れていない。鉄道の運行に支障が生じないよう神経を使うほか、深度により変わる土質や、急に現れる地中障害物に対応する現場力が求められる。

難工事で活躍しているのが同社の得意とするシールド工法だ。前面にカッターを備えた円筒形の機械で地中を掘りながら、その後ろでブロックを組み立てることを繰り返してトンネルを造っていく。

現場を仕切る鈴木高広・江東幹線シールド作業所長は「深い場所になるほど施工が難しくなる。いろいろな地層や想定外のトラブルにも遭遇するが、技術的に対応できる我々の出番」と言い切る。豊富な施工ノウハウは他社を寄せ付けず、関係機関から技術的な意見を求められることも増えた。「技術者冥利に尽きる」とプロのプライドをのぞかせた。



現場に立つシールド作業所長（左）鈴木高広

平成7年に入社。熱意が認められてシールド現場ほぼ一筋で25年になる。

土木は経験工学といわれる。トンネルを掘り進める中で分かることだが、計算通りにいかないことが少なくない。意図しない出来事に対応できるようにするには、先輩に答えを教えるだけでなく、自ら答えを導き出すための考え方が大切になる。

入社4年目に当時の現場所長だった大隅健一社長から教えられた。若手にはこうした考えを理解し身に付けてほしいと人づくりに励む。大切なのはコミュニケーションで、押しつけではなく相互理解による育て方改革に励む。

一方で技術の継承・進化にも挑む。古き良きレガシー（遺産）を残しつつ、時代のニーズに合わせて「変わり続けることが重要」と説く。人工知能（AI）やICT（情報通信技術）を積極的に採用するとともに、現場の創意工夫で「独自技術の開発につなげたい。技術を生み出すのが大豊」と将来を見据える。